

たぬきの札

【Act I】

八五郎(以下、八)「おい、おい、そこの男の子。そりゃいけねえな。子どもってのは動物と仲良くするもんだよ。犬をいじめんじゃねえ。ホラ、ホラ、石なんかほうるんじゃねえよ」

子供「おじさん、これ犬じゃねえんだヨ。狸だよ」

八「狸だ？ そうか、犬にしちゃあナ、口がとんがらがって。子狸のようだな」

子供「そうなんだヨ、畏かけてね、親狸はかからなくて子狸がかかっちゃったんだ。今、みんなでとつかまえてふん縛ったんだけれども、狸汁にして食っちゃまうんだ」

八「おい、おい、かわいそうなことをするねえ。この狸も、お前たちと同じように子どもじゃねえか。え？ 子狸庇うんじゃ、おまえは親狸が化けた人間なんじゃないかって？ バカ言っちゃいけないよ、さあ、ここにある銭を全部やるから、飴でも買ってこい。さ、おじさんが狸を買ってやるから、その子ダヌキ、こっちへよこしなヨ。狸よ、さアさ、ほどいてやるから。さア、逃げろ、逃げろ。ハハハ、どうだィ、丸くなってとんでいっちまィやがる。あー、でも、いいことをしたヨ。生き物の生命(いのち)を助けていい後生だ。だけど、なけなしの銭、子どもにみんなくれちゃったもんなア。文無しになっちゃったな。まアいいか、なんとかなるだろう」

○「(トン、トン、トン、トン)コンバァー(トン、トン、トン、トン)コンバァー」

八「フワァー…誰でィ、夜中に。そう戸をたたくなよ。寝ちゃったんだヨ、もう。明日にしてくんないかな。誰なんだ」

○「タヌー」

八「えッ、なに」

○「タヌ、タヌース」

八「うーん？なんだ、起き抜けだから、よく聞こえねえや。狸がモソモソ言ってるようだな」

○「その狸です」

八「その狸だって言いやがる。ははあ、誰か夜遊びして閉め出しくって俺ン家（ち）来て泊めてくれってんだろ。全く俺が独り者だからって。待ちな、待ちな、今あけてやるから。冗談じゃねえぜ、こんな夜中に。おう、なんだ、誰もいねえじゃねえか」

○「へへへ、こっち入っております」

八「なんだ、なんだイ。やに真黒いものが。なんだ」

○「へへ、狸でございます」

八「狸だ？この野郎、どこから入ったんだ」

狸「今、親方がおあけになったとたんに、股ぐらスーツと通って入りました。ちょいと見たら、随分フンドシが汚れてた」

八「大きなお世話だい。なんだってこんなとこ飛びこんできやがったんだい」

狸「昼間、あのやぶのところで子どもにつかまりまして危ないところ、親方が買い取って逃がしてくださいました。あの時の子狸でございます」

八「あーア、そうか、あん時の狸か。狸だとかどじょうなんてエのはみんな同しよ
うな面(つら)してやがるからなア。そうかい、あれからどうしたい」

狸「穴に帰りましてそのことを両親に申しました。大変親父は喜んでおりまし
て、実に立派な方なんてんで、腹をたたいて感心してました」

八「ウフツ、膝をたたいて感心するてエのはあるがなア、狸のはやっぱり腹をた
たくのかなア。そんなに感心してたか」

狸「いやア、実に立派な方だっというんで、そういうかたは人間にしておくのは
惜しいと言ってました」

八「なんでィ、人間にしておくのが惜しいってエのは」

狸「狸の仲間に入れてあげても恥ずかしくない人だ」

八「よせ、馬鹿なこと言うねえ。そうかい、そんなこと言って親父がほめてたか
い」

狸「ご恩人だから、早速お前が行ってご恩返しをしてこなくちゃいけない、とこう
言われまして、今晚お礼かたがた恩返しにあがったようなわけでございます。
どうぞひとつよろしく」

八「おお、そうかい。義理がてエこと言ってやがんなア。恩返してなにをやるつ
もりだ」

狸「べつにこれってできることもございませんから、親方がお仕事からお帰りに
なりましたら、おみ足でもさすりましたり、肩でもたたきまして、あなたのおかみ
さん代わりになつて」

八「おお、断わろうじゃあねえか。狸のおかみさんがありゃア困らあな。まアいいや、そのお心持ちだけで充分だ。いいから穴へ帰ンなよ」

狸「いやア、このまま穴に帰れませんので。なにしろうちの親父は昔気質(かたぎ)でございますから“恩返しをしてきたか”“してまいります”なんつった日には、とんだことになりますから。“なんだこの馬鹿野郎、恩を受けて返さない奴があるか。そいじゃまるで人間も同様じゃねえか”」

八「おい、おい、よせヨ。馬鹿なことを言うなヨ。いいからお帰りよ」

狸「置いてくださいヨ。このまま帰るってエと、勘当になっちゃいますから」

八「勘当されちゃアかわいそうだな。じゃア、まア、いてみろイ。いるのはいいけどな、俺のそこは食い物なんぞなんにもねえぞ」

狸「そんなものは自分でどうにかしますから」

八「そうか。着て寝るものもねえぜ。俺は一枚のせんべい布団にクルクルってくるまって寝てるんだ。お前の着て寝る布団がねえや」

狸「そんなものはいりません。自分のをひろげて寝ますから」

八「ああそうか、よく聞くなア、狸の金は八畳敷きだなんてエのは。そんなにひろがるのか。ちよいとここでひろげて見せねえか」

狸「八畳は親狸でして、私はまだ子狸ですから、ホンの四畳半ぐらいで」

八「四畳半？ 粹なもんじゃねえか。暖けえのか」

狸「暖かいものです。なんなら半分かけましょうか」

八「おお、そいつはちょっといいや。じゃア、お前それにくるまろうが、勝手にして寝ろィ。今晚は遅いから寝ることにして、万事明日のことだ。」

狸「では、休ましていただきます。お休みなさいまし。グー、グー」

八「なんだ、随分寝つきのいい狸だなア。もうイビキをかいてやがらア。オイ、お前目エあいてんな」

狸「ヘエ、狸寝入りです」

八「ああ、狸寝入りか」

【Act II】

狸「親方も、しょうがねえな。人間なんざ寝ちゃうと死んだんだかなんだかわからねえな。親方、お起きなさいまし。モシ、親方」

八「お、お、へえ、どうもすみません。いやね、タベね、変なのと会ったもんだからネ、すっかり寝そびれちゃってね。おい、おい、なんだ、俺はお向こうのおかみさんだと思って話をしたらそうじゃアねえな。見慣れねえ小僧じゃねえか。どこの小僧だい。」

狸「私がそのタベの狸です」

八「なに、あッ、畜生、化けやがった」

狸「大きな声をしちゃいけません。狸のまんまじゃいられませんからね、目立たないように化けてみたンすヨ」

八「そうかい、うまく化けるもんだなア。ちょっと回ってみろ。しっぽなんか出てねえな。うめえもんだな」

狸「ええ、仲間じゃなかなかたちがいいってほめられてますから。はじめあなたのおかみさんになったんですがね、どうも急に女房ができちゃうのは変なもんだと思い、それでおかみさんやめまして、一旦きれいな小僧に化けたんですがネ、家(うち)ィ見ると随分汚ない家ですから、遠慮しまして、汚ない方に化け直りました」

八「なんでィ、変なとこに遠慮するなヨ。おい、家が汚ねえどころじゃねえ、見違えるほど小ざっぱりしてきれいになっちゃったネ」

狸「ええ、掃除をしましてネ。はき出すったって、ほうきはなし、はたきはなし、仕方がないからしっぽではたきましたヨ。随分しっぽの毛が抜けちゃった」

八「あんまり無理をすんなヨ。そうかい、とにかくめでいいナ」

狸「それから、もう、ご飯の仕度ができてますからどうぞ。」

八「ご飯の仕度たって、米っ粒一つねえぜ。いやだよ、変なものを食わしたんじやア」

狸「いや、ご恩人ですから、そんな馬鹿な真似はいたしません。そらもう、ちゃんと買ってきました」

八「買ってきましたって、銭がねえ」

狸「火鉢の引出しをあけましたら、古い葉書が何枚かありました。私が葉書を二、三回もスーツとなでますてェと、そいつが立派な札になっちゃうんで。そいつで化かして買ってきたから大丈夫です」

八「ヘー、なにかい、お前がちょいと葉書をなでると札になるのかい。そいつはありがてえな。ちょいとお前に頼みがあるんだがな。俺は見ての通り、独り者で怠け者でな。方々に義理の悪い借金があって、今から一軒取りにくる奴があ

るんだよ。地方からくる呉服屋でな、毎日のように催促に来てうるさくてうるさく
てしょうがねえ。五円ありゃア釣銭(つり)がくるんだがな。そこに葉書はいくらか
取ってあるからよ、札をひとつこしらえといてくれねえか」

狸「親方、それはだめです。向こうの手に渡ってしばらくするとお札が元の葉書
になっちゃいますから。ですから、私が魚屋に行く時は、おじいさんになったり、
米屋に行く時はおばあさんになったり、酒屋行く時は女中になったり、そうしな
いと、あやしまれますから。しまいにはあわ食っちゃって、おじいさんとおばあさ
んと半々に化けたり」

八「危ねえな、オイ」

狸「驚いて化け直りましたが、家に取りに来る方はまずいです。うちから出た
お札が葉書になったとなりますと、親方があやしまれることとなります」

八「ああ、そうか。狸の方が考えが深いな。なんとかなんねえかな、四円いくら
なんだがなア。じゃ、どうでイ、大入道かなんかになって、借金取りが来たらワ
ーとか言っておどかしちゃうとか、そういうことはできねえかい」

狸「へへへ、どうもそういうことは。私のおじいさんの代に化けたってエことは聞
いてますけどね、大入道なんぞ、いまどき馬鹿馬鹿しくてあんなのは」

八「なんでイ、馬鹿に威張ってやがんなア。だめかよ、オイ。なんとかなんねえ
か。」

狸「そうですねあ、じゃア、私がお札になるからお使いなさい」

八「なんだ、お前、札になれるのかよ」

狸「ええ、札はうまいもんですヨ。よくね、札に化けて人間をおどかして、親父に
叱られたことがあります。お札になって道端にころがってるんですヨ。そうすると
ネ、ホラ、こんなところにお札が落っこってるなんてんで、拾おうとしますから

ね、そこんところを引っかいちゃう」

八「おい、札が引っかくのかヨ」

狸「驚きますヨ。そいで齒でガツと食いついてやるんですヨ。びっくりしましてねエ、腰を抜かす奴もいる、真青な顔して逃げる奴もいる。それを木の陰で見てみんなで笑ってるんですヨ。人間なんてものは愚かで卑しいもんだと思って」

八「おい、おい、あんまりそう人間を悪く言うなヨ。俺だって人間だぜ」

狸「あなたは人間というより、まアどっちかっていえば狸に近い方で」

八「馬鹿なこと言うなヨ。そうか、それじゃ一円札を五、六枚こしらえといてくれ」

狸「五、六枚だなんて、バラバラになるんすか。一匹一役ですからネ、どうしてもバラバラでお入用なら、これから穴に帰りましてネ、親戚一同みんな呼び集めまして」

八「おい、いけねえよ。そう狸を連れてきちゃア困らァな。じゃアお釣銭(つり)は向こうへくれちまえばいいんだからな、五円札に化けろ。五円札に」

狸「ああ、そうすか。じゃあ化ける手数は同じですからネ、七円の札に」

八「おい、そんな半端な札はねえんだ。五円でいいよ、五円で」

狸「そうすか」

八「じゃア、早く化けてみてくれ」

狸「あの、こっちを見てちゃまずいんですがネ。こう、手拍子三つお願いします。そのとたんにでんぐり返しをやりますから」

八「おお、そうかい。目をつぶって。じゃ、いいかい、手拍子三つだな。ヨ、ヨ、ヨイ。あれ、あのたぬ公、いなくなっちゃまいやがった。えッ、何。あなたの膝の前だ？おい、うまく化けやがったなア。こりゃア、どう見たって立派な札だぜ。へー、こりゃアうめエもんだ、俺には噛みつかねえでくれよ。札になると目方まで軽いなア。何、そこが難しい？おう、なんでイ、裏に毛が生えてるじゃねえか。え、裏毛の方が暖(あった)かです？冗談じゃねえ、シャツじゃねえんだから毛を取れ、毛を取れ。なんだ、毛がなくなったらノミが出てきやがった。エッ、とってください？やだな、本当に。俺、札のノミとったのはじめてだよ。オイ。え？そう回しちゃアいけません？目が回る？札が目を回しちゃアしょうがねえな」

狸「キッ」

八「変な声出すんじゃねえ。え？たたんじゃいけません、たたむと腹を押すから小便が？小便はいけねえな。なんだい、こっちの方が頭です？冗談じゃねえ、札に頭があるとは思わねえな。えッ、血が下がるから枕貸せ？札が枕をしちゃアいけねえだろ。おい、おい、どこへ行くんだ、どこへ。なに、小便をしてくる？だめだい、化けねえうちにやりねえ。札が濡れちまうじゃねえかよ。」

【Act Ⅲ】

縮屋(以下、商)「えー、お早うございます。呉服の縮屋でございますが」

八「お、おう、お前かい。いや、もうお前が来る時分だと思ってな、さっきからここへ狸が、ウン、いや、なんだ、五円置いて待ってるんだ。いくらだ」

商「へイ、ありがとうございます。えー、残りが四円三十銭でございますが」

八「あ、そうか、そうか。こっちへ貸してみてくれイ。判こが押してあるナ。受け取りをもらえばこっちのもんだ。じゃ、払うからな。えーと、どっちだっけな。そうそう、こっちの方が、こっちが頭だい。さア、持っていつてくれよ。こっちが頭だから

な、逆さにしねえようにな。血が下がるとかわいそうだから」

商「ハハハ、ありがとうございます。こんな早くみんないただけようとは思いませんでした。いや、半分でも頂戴できたらと思ってやってきたんですが。ああ、きれいなお札ですなア。折り目がなくてどうも、手の切れそうなお札で」

八「いやー、手なんぞ切れねえぞ。食いつくぜ。まアいいや、持ってけヨ」

商「へへへ、どうも、ありがとうございます。えー、そうしますってェと、これでお釣銭(つり)でございます」

八「ああいいよ、いいよ。お前に随分むだ足を踏ませたからな、江戸っ子だい、ねえ時や払わねえが、ある時はパツと払っちゃうんだイ。釣銭なんぞいらねえ。お前にみんなくれてやるから持ってきなイ」

商「そうですか。それはどうもありがとうございます。じゃ、遠慮なく頂戴……」

八「おい、よせよ、おい、だめだよ。たたむと腹を押すからお前、小便しちゃうからヨ。平らにして懐に入れて持ってきなヨ、おいおい、回すなよ、そこでそんなに。目が回るじゃねえか。その、なんだい、早く懐に入れていたわって連れてけよ」

商「いたわって、連れてく……どうもご冗談ばかりおっしゃって。では、このまま頂戴いたします。じゃアまた、ご用の節は」

八「ああ、頼むからな。気をつけて帰んなよ。ふふふ、ありがてえ、ありがてえ。とうとうあいつは狸を懐に入れて喜んで帰っちまいやがって。でも待ってくれよ。あいつはまたノン気だからナ、懐が暖かくて寝心地がいいなんて、寝ちまわねえかなア。札がイビキをかいたなんてったら大変だからなア。うまく帰ってくればいいけど」

狸「ただいまー」

八「おう、どうしたい。心配してたぜ」

狸「ええ、どうも驚きました。向こうに渡す時に親方が変なこと言うもんですから、あいつはあそこに五円札なんかあるわけはねえって言うんですヨ。表へ出てからあっしを懐から出しましてね、天日にすかしてみたり引っ張ってみたり脇の下かきまわしたりするもんだから、くすぐったくて驚いちゃった。笑っちゃいけないとこっちは必死に我慢してましたが、そのうちにていねいに四つに折りたたんで、こんな小さながまロィ入れてパチン。あっしは腹を押されて、背骨が曲がってこんなになっちゃってネ、とうとうたまりかねてがまロン中に小便しちゃいました」

八「おい、がま口じゃいけねえな」

狸「そうになったら入ってられませんから、がま口の脇を食い破りまして逃げてきました」

八「うまく逃げられたなア」

狸「ええ、逃げてくる時、がま口の中にネー円札が二枚ありましたから、ちょっとお小遣いにくわえてまいりました」

八「おい、おい、札が札をくわえちゃアしょうがねえじゃねえか」